

〈獵師グラックス〉の一背景（日記をめぐるFの挿話）

——カフカの創作過程の試み(2)——

藤川晴男

Du bist die Aufgabe. Kein
Schüler weit und breit. (H 41)

I

翻って1914年12月19日付の日記に先ず目を留めることから『獵師グラックス』の第2の考察を開始しようと思う。

「どんな小説でも書き出しは、まずはお笑い草のようなものだ。この新らしくて、まだ未完成で、どこもかしこも傷つきやすい生きものが、この世の既成の体制のなかで、生命を維持してゆけるだろうなどとはとうてい思えない。なぜといえば、この世の体制もあらゆる組織同様、みずからを閉ざし他者を排して完結しようと努めているからだ。ただその際忘れがちなのは、まっとうなものであれば、その小説が、たとえまだ完全に筋の展開はみせなくも、自らのできあがった組織をうちに孕んでいる、ということ。それゆえにこの点で、小説の書き出しに対する絶望はいわれのないもので……」と述べ自らを励まし、戒める。続けて「そうでなければ、両親はおなじく赤んぼうを目にして絶望しなければならぬ筈だ。なぜなら両親は、こんなみじめなお笑い草みたいなものを (dieses elende und besonders lächerliche Wesen) この世に産みだすつもりではなかったからである」とまで言及する。これは飛躍などではなく、作品の生産過程を分娩の営為労働と見做す⁽¹⁾ カフカにとっては、小説の書き出しが、お笑い草めく (lächerlich) と思われるのは当を得た (berechtigt) 表現であり、皮肉な、とは決していえないのである⁽²⁾。

微細な目にみえぬ浮遊物が、一瞬の魔力に惹き寄せられ惹き合い結晶をはじめたとき、「この新らしくて、まだ未完成で、どこもかしこも傷つきやすい生きもの」 (dieser neue, noch unfertige, überall empfindliche Organismus) でも、「まっとうなものでさえあれば、その小説が、たとえまだ完全に筋の展開はみせなくとも、自らのできあがった組織をうちに孕んでいる」 (die Novelle, falls sie berechtigt ist, ihre fertige Organisation in sich trägt, auch wenn sie sich noch nicht ganz entfaltet hat) と信じてかかるカフカの創作に臨むナイーブな、しなやかな態度をわれわれの〈グラックス〉〔第4最終稿〕に転じてみた場合どうなるだろうか？ 〈グラックス〉の書き出し (Anfang) ははたして、ここに述べられてあるような意味の比喩として「みじめなお笑い草みたいな」分娩であったのであろうか？

答は端的に言うと“否”になる。その過程をかなり克明に跡づけ、論証を試みたのが言わば、前稿の第1の考察であったということも一面では可能であろう。むしろ、思い切って大胆な推定を不せば、カフカ本来の書きぶり・就筆姿勢にはどのように輾転反側してみても、

〈グラクス〉は所詮なりようがなかった、もどらなかつた、という分りやすい反証としてくだんの日記を解したのである。

論より証拠、この日の日記の書き出しを窺えば、極めて興味のある事態にわれわれは接することが出来る。

19. Dezember. Gestern den »Dorfschullehrer« fast bewußtlos geschrieben, fürchtete mich aber, länger als bis dreiviertel zwei zu schreiben,……ich schlief fast gar nicht, machte nur etwa drei kurze Träume durch und war dann im Bureau in entsprechendem Zustand. Gestern die Vorwürfe des Vaters wegen der Fabrik:……Ging dann nach Hause und schrieb ruhig drei Stunden,……Ging heute, Samstag, nicht zum Nachtmahl, teils aus Furcht vor dem Vater, teils um die Nacht für die Arbeit ganz auszunützen, ich schrieb aber nur eine und nicht sehr gute Seite. (T 449 f)

すなわち、ほとんど夢中で昂奮しながら昨夜から『村の学校教師』就筆にとりかかっていたことを。けれども、〈労働者障害保険局〉の勤めのために、夜は1時45分過ぎまで書くことを恐れ、床に就くが眠れない。夢をみている意識だけが先行する。三つまで短い夢を覚えている。それでも役所の期待に添える状態に復して事務所へ出る。このころ兵役についた義弟の工場の監督をしていたカフカは、昨日は工場のことと叱責を受ける、「お前はわしを巻き添えにした」などと父から威される。比較的はやくに引ける勤めから帰宅後、心を落ちつけて三時間、プラハのネルダ小路街の妹エリの住居の自室で書きつぐ〔註(4)参照のこと〕。父の叱責を受けとめ、自分の責任の明らかなのを意識しながら昨夜は書きもしたのであるが、今日は土曜日だ！ 半ばは父を恐れ、半ばは夜どおし仕事に使いはたしたいから、父の家へ夕食には行かないのだ。それにもかかわらずたったの一頁、それもたいして上出来とはいえぬ一頁が出来上ってしまう。

このような結果にしびれを切らし、クリスマス休暇を四日間とり、中部ボヘミヤの Kuttenberg (Kutna Hora) へマックス・プロート夫婦と保養に出かけたのは、大都會ではすでにかなり大戦の恐怖と不自由がしのび込んでいた〔7月28日、第一次世界大戦が勃発/ 2. August. Deutschland hat Rußland den Krieg erklärt. - Nachmittag Schwimmschule. T 418〕。骨休めのほかにその地の記念建造物を見たいためもあったのだが⁽⁵⁾、カフカにしてみれば何より、この休を利用して18日の夜からとりかかったこの作品を年内に一気に書きあげ肩の荷物を下ろしたかったことが、その際書き留めた26日の日記から明らかに分る。

「この自由な四日間をどれほどあてにしていたことか。それを正しく用いることをどれくらい時間をかけて考えていたことか。しかも今恐らく当てがはずれて (verrechnet) しまった」と慨嘆している。「今夜はほとんど何も書かなかった。たぶんもう『村の学校教師』を続けることはできないだろう (Heute abend fast nichts geschrieben und vielleicht nicht mehr imstande, den »Dorfschullehrer« fortzusetzen)。一週間このかた書いてきたし、拘束されない三晩があれば整ったかたちで、目立つ欠陥もなく (rein und ohne äußerliche Fehler) 仕上っていた筈」だと、言わずもがなの自信のほどを披瀝しているのも、「これはまだほとんど始まったばかりであるのに (trotzdem er noch fast am Anfang ist)、すでに

癒しがたい欠陥を二つも持ち、その上発育不全に (verkümmert) おちいつている(T451)」として冷静に自己批判できているからなのであろう。何よりも註(1)での原体験と、それに引続く『変身』体験を踏まえ、8月以来の旺盛な創作活動が自信の裏づけとなっているのは間違いない。従って、「拘束されない三晩があれば」という仮定は、カフカにとっては極めて重要で、痛切なのだ。

かくて »Der Jäger Gracchus《の現われる凡そ2年前、1914年12月31日の日記になると「まるでぼくにふさわしいことだ」と最後に断わりながら⁽⁴⁾、珍らしく一年間の回顧展望を試みている。「8月からの仕事は、だいたいのところ量が少なくもないし、また質が悪くもない。しかし、量の点でも質の点でも、自分の能力の限界まではきていない。限界まで来なくてはいけなかったのに。とりわけ、あらゆる兆候から考えれば(不眠、頭痛、心臓の衰弱)、ぼくの能力はもう長くは続かないだろうから。未完のものに手を加えたのは、『審判』(»Der Prozeß«), 『カルダ鉄道の思い出』(»Erinnerungen an die Kaldabahn«), 『村の学校教師』(»Der Dorfschullehrer«), 『検事補』(»Der Unterstaatsanwalt«), それに比較的短いいくつかの書き出しの部分など (und kleinere Anfänge)。書きあげたものではわずかに『流刑地にて』(»In der Strafkolonie«)と『失踪者』(『アメリカ』のこと) (»Der Verschollene«)のなかの一章だけ[„Das Naturtheater von Oklahoma“ H. Binderの註を参照のこと]。どちらも二週間の休暇中の (beides während des vierzehntägigen Urlaubs)(T453)」仕事であった。
[Nicht Selbstabschüttelung, sondern Selbstaufzehrung. <自分を振りはらうのではなく、自分を使いつくすことだ> H105]

翌1915年冒頭の日記は1月4日に始まっている。「新しい物語を開始する途方もない欲求に応じかねた。欲求だけではすべて何の役にもたちはしない。いく晩か夜を更かして物語を追いかけるようでなければ、それらのなかの羊水は破れ、むなしく砂にすいとられてしまう (Kann ich die Geschichten nicht durch die Nächte jagen, brechen sie aus und verlaufen sich)。いま『検事補』⁽⁵⁾がそれだ。(T454)」と述懐する[「いく晩か夜を更かして物語を追いかけるようでなければ」というときのこの“jagen”(「追いかける」)は、カフカに生得の考え方で特に注意しなくてはならない]。とうとうなか1日をおき6日に至って、〈『村の学校教師』と『検事補』の完成は差し当り見合わせる (vorläufig aufgegeben), といって『審判』を続ける気力もほとんどない (Aber auch fast unfähig, den »Prozeß« fortzusetzen.) (a. a. O.)〉状態に陥るのである。そうして、日記は17日に飛び、「工場のことを考えると」(Die Gedanken an die Fabrik) それだけで「頭がしきりに痛み、それを鎮静するのにたえず頭に手を当てがっていなければならず (カフエー・アルコでの状態)、帰ってから長椅子のうえで胸の痛み (und Herzschmerzen zu Hause auf dem Kanapee) (a. a. O.)」を訴える [1917年9月の結核罹病の前兆?]。このことを先ず手はじめに書き留めてから、8月以降の〈時間割の反省〉を繰りひろげる場面もみられる。それは、

「昨年の8月以来、時間をさっぱりうまく利用していないことが今に分かった。午後をたっぷり眠って、夜はおそくまで仕事をつづけられるようにとたえず試みてはみたものの、それは無駄であった。二週間ほどたつうちにすぐに分ったことだが、深夜一時過ぎに床に就くことはぼくの神経が許さない。そうするともうぜんぜん寝つけなくなり、つぎの日が耐えがたいものになり、使いものにならなくなるからだ (denn dann schlafe ich überhaupt nicht

mehr ein, der nächste Tag ist unerträglich und ich zerstöre mich.)。そこでぼくは、午後は長すぎるほど寝ずに横になり、夜はまためったに一時過ぎまでは仕事をせず、それなのにいつも仕事を始めるのは、早くて11時ごろになる。これはまちがっていた。8時か9時には仕事を始めなければならない。夜はたしかに最良の時(賜暇休だ!)なのに、それがぼくには思うにまかせず手に負えない (Ich muß um acht oder neun Uhr anfangen, die Nacht ist gewiß die beste Zeit (Urlaub!), aber sie ist mir unzugänglich.)」(T455)。

以上は、さきに去年暮の26日付で、はじまったばかりの『村の学校教師』に、癒しがたい欠陥を (schon zwei unheilbare Fehler in sich) 見出し、且つ発育不全におちいつている (und ist außerdem verkümmert T451), というあの自己省察に続けて、「今から新しいスケジュールだ! 時間をもっと有効に使え!」(-Neue Tageseinteilung von jetzt ab! Noch besser die Zeit ausnützen! T451f) という警告、このスケジュールに対する自らの解答を示すのである。そのうえ、「夜中の1時45分以後まで書くことを怖れる」平凡な理由さえも明記する。にもかかわらず、書くことが生きることであり、「それは、自己保存のための戦いで」(es ist mein Kampf um die Selbsterhaltung. 31. Juli 1914 T418) もあった31才になるカフカという一介のサラリーマン。第一次世界大戦勃発(7月28日)後、にわかには激しい創作意欲の奔流に押し流されそうになる彼の生活を、これが辛うじて構築し直し、安定した持続を計ろうと苦慮する平常心が、一夜明けると現実には既に、次のような事態になってはねかえってきているのだ。

18. Januar. In der Fabrik bis halb sieben in gleicher Weise nutzlos gearbeitet, gelesen, diktiert, angehört, geschrieben. Gleiche sinnlose Befriedigung danach. Kopfschmerzen, schlecht geschlafen. Unfähig zu längerer konzentrierter Arbeit. Auch zu wenig im Freien gewesen. Trotzdem eine neue Geschichte angefangen, die alten fürchtete ich zu verderben. Nun stehen vor mir vier oder fünf Geschichten aufgerichtet, wie die Pferde vor dem Zirkusdirektor Schumann bei Beginn der Produktion. (T456)

相も変わらず(保険局勤務後)6時半まで工場の手伝い。書類読み、口述・筆記、報告聴取の無益な仕事である。相も変わらずその後の無益な満足感である。頭痛、よく眠れない。集中して時間をかける仕事が出来ない。外気に当たる暇も亦なさ過ぎたのだ。にもかかわらず新しい物語にとりかかる、今までのいくつかの作品をこれ以上損なわぬためにも。かくて、ぼくの前には、まるでサーカス団長シューマン親方の、出番をまつ馬のように⁽⁶⁾四、五篇の物語が轡を並べて勢揃いする。

こうして、「絶えず発端だという不幸」⁽⁷⁾な状態が、形を整えてきだすのである (Das Unglück eines fortwährenden Anfangs T542)。不眠症と頭痛を押し、日常の寸暇をさき、創作にとり組む憑かれた彼のこのころの最も大きな作品は、申すまでもなく前年8月以来着手し、今年1月6日に〈続ける気力もほぼなくなる〉あの『審判』(Prozeß)であった。〔この未完の長篇『審判』は死の翌年(1925)にいちはやく出版されて、カフカの正当な評価を歪める著しい原因を、これら(『城』は1926年出版)はつくった。詳しく適切な指摘⁽⁸⁾は、「詩人カフカ」(フリードリヒ・バイスナー)―カフカ論集(国文社)―の講演翻訳を参照されたい〕〔この1914年8

月から年末にかけて、カフカの創作欲は自らも認めるごとく極めて旺盛であったが、この年末からは急速に枯渇する。そうして1916年の秋から再燃する。このクッションになっているのが次章に言及する問題のFの存在なのだ]

が、とも角も煩瑣を厭わずこれまでに〈日記〉の引用をもっぱら心掛けてきたのも、いかなれば、はじめにことわった通り、問題の『猟師グラックス』の発端部分の、長年にわたる就筆経過と比べたとき、例えば、これまた未完に終わったとは言え、いかに『村の学校教師』⁹⁾の書き出しが——その姿勢、動機、スピードに到るまで著しく違っていたか、このありさまを、作者自身の言表に徴し、即物的に浮び上らせてみたまでなのである。

〈ぼくはしばらく時がたってから書きはじめることもあるが、その場合にはまるで虚ろな空気のなかからのように前の言葉をつむぎ出してくる。やっとひとつの言葉が手に入ったとしても、まさしくそこにはそのひとつの言葉があるだけで、仕事は全部ははじめからやりなおした。T190〉

この言葉は、カフカが〈日記〉をつけはじめた翌年、1911年12月13日付のなかの表白であって、すでに言葉——つまりは一つの作品、一つの世界に対する彼の対処のあり方の本質がはっきりと現れている。であればこそ彼は、いちどきに数篇の物語をラインの上に並べて仕事をすることもできたし〔註(1)の略年譜イタリック体の個所を参照〕、執筆速度は予想以上にかなり速かったのである。

ところで、書くこと (schreiben) ——カフカはいつも書くとはいわず、「ペンで紙を引っ搔く」(kritzeln)¹⁰⁾ と称していた——に必然的にもなる幾多の苦悩(と貴重な数少ない喜び)が滲み出てくるのは当然のことなのだが、その内情にわけ入ることは残念ながら回避せねばならないだろう。ただこの際、記載した日記の時空を取囲むかたちをとって、注意すべき二つの事柄に触れてみたいと思う。二つはともに『猟師グラックス』の底を流れる見逃すことの出来ない、大きな背景を成していると思われるからだ。

第一の事柄としては、前稿でも指摘してある、ベルリンの女性 フェリーツェ・パウアー (Felice Bauer: 通称 F.B.) との関係¹¹⁾であり、第二に静寂 (Ruhe) ということの意味である。二つはともに縋いまじり合っており、結局は書くという一本の道と化し、誠実な、苦悩をおさえた生き方の問題となって独身者・カフカの中枢に迫り来るのである。

II

「このノートは、1913年5月2日に¹²⁾、ぼくの頭を不確かにしたFで始まっている。「不確か」(unsicher) というかわりに、もっとひどい言葉をつかうなら、ぼくはこのノートを、そのFという始まりで (mit diesem Anfang) 終えること (schließen) もできる。」(T362)

この〈日記〉の言葉をカフカが書きつけたのは、1914年2月15日、夜12時15分前以後の時間帯である。第一章で触れたいいくつかの〈日記〉に先だつこと凡そ10カ月前のことだ。Fとは問題の F.B. のことであり、日曜日でもあったらしい。この日の書き出しは、

15. Februar. Wie lang mir dieser Samstag und Sonntag im Rückblick scheint. (思えば何とこの土曜と日曜日が長くぼくには思われることか)

……という感嘆文で始まっている。次いで、20数項目にわたり、思い浮ぶままにアット・ラン

ダムに事実を羅列し、最後に今の時刻まで添えこの一かたまりの記述を終えている。〈ヴェルチュのところで婚約談議〉という一項目をとりあげ、5行にわたる会話体の文を別枠に仕立てあげ、引続き更に別行には冒頭の記述をこの日の日記の締め括りとして書き留めたというわけである。

先ずわれわれは20数項目にわたる記述のなかから、特に本章節に係わる事項だけでも拾いあげてみたくなる。その記述の仕方はこれはまた、日記そのものの手本のように簡明を極めている。この際、はじめから省略するわけにはいかないだろう。原文と訳を添えるので、両者に目を通していただきたい。

- 1), Ich habe mir gestern nachmittag die Haare scheren lassen (昨日の午後は散髪をした)
- 2), dann den Brief an Bl. geschrieben (それから Bl 宛に手紙を書いた) [Bl. は Grete Bloch で Felice の女友達、註①の1913年11月1日の個所に見える]
- 3), bin dann einen Augenblick lang bei Max gewesen, in der neuen Wohnung (それからほんのしばらくマックスの新居を訪ねた) [もちろん Max Brod のこと、新婚まもないという事実]
- 4), dann Elternabend neben L. W. (両親の夕べでは L. W. と同席) [Ludwig Winder か (1889~1946) ジャーナリスト兼作家]
- 5), dann Baum (in der Elektrischen Kr. getroffen) [カフカの友人で盲目の詩人 Oskar Baum] (電車で Kr. と逢う)
- 6), dann auf dem Rückweg Maxens Klagen über mein Stummsein (帰り途ぼくが黙っているのもマックスがこぼす)
- 7), dann die Selbstmordlust (それから自殺の欲求)
- 8), dann die Schwester vom Elternabend zurückgekommen (やがて妹たちが両親の夕べから帰宅)
- 9), unfähig, das geringste zu berichten. (何ひとつ報告できない。
ここまででひと区切りとなる。以下また、このまま列記してしまえば、
- 10) Bis zehn im Bett, schlaflos, Leid und Leid. (10時まで床のなか、眠れず、悶々。) [その理由はすぐに判る]
- 11), Kein Brief, nicht hier, nicht im Bureau (音信なし、ここにも、事務所にも)
- 12), Brief an Bl. auf der Franz-Josefs-Bahn eingeworfen (Bl 宛の手紙をフランツ・ヨゼフ駅で投函)
- 13), Nachmittag G. (午後 G. が来る), Spaziergang an der Moldau, Vorlesung in seiner Wohnung (モルダウ河畔を散策、かれの住まいで朗読)
- 14), merkwürdige Mutter beim Butterbrotessen und Patiencelegen (バターパンを食べカルタ占いをするときの奇妙な母)
- 15), allein zwei Stunden herumgegangen (ひとりで2時間ばかり歩き廻る)
- 16), entschlossen, Freitag nach Berlin zu fahren (金曜にベルリンへ行くことを決意)
- 17), Khol getroffen (コールと逢い)
- 18), zu Hause mit Schwägern und Schwestern (家で義弟や妹たちと一緒に)
- 19), dann bei Weltsch Besprechung der Verlobung (Kerzenauslöschen des J. K.) [前述の

- 通り。(J.K. のロウソクを消すこと)とは何だろう?)
 20), dann zu Hause Versuche, aus der Mutter durch Schweigen Mitleid und Hilfe herauszulocken (それから家で、黙っていて母親から同情と援助をうまく引き出す試み)
 21), jetzt Schwester, erzählt vom Clubabend (いま妹がクラブイベントの話をする)
 22), es schlägt dreiviertel zwölf Uhr. [前出; 12時15分前]

とうとう一字残らずそのまま転記してしまった。22項目、奇しくも22行でおさまっている [T361 f]。長い土曜から日曜日だった、という前提を含めれば23項目だが。日記魔の片鱗をみせつけられる興味ある事例のひとつであり、ここでとりあえず当面の問題にしぼり、関聯事項を順次拾ひあげてみる。2) 7) 11) 12) 16) と、これらに付随するものと考えられる 6) 9) 10) 15) 20) とであろう。このうち最も刺戟的な重要項目は言うまでもなく 7) である。これが解答は前日、2月14日の〈日記〉に精しい。何が機縁で《自殺の欲求》が生じたかをおよそ推測出来るので、前述の日記形式とはまるで異なる、主情の際立つ(「両親の夕べ」というもの珍しい催しの雰囲気をも嗅ぎとれる)全文を訳出する。とすれば、この22項目の半ばが(BI宛の)手紙を軸に、Fを中心に展開しており、本章節冒頭の文句に収斂して行くありさまがおぼろげながら分るかもしれない。

「2月14日。

ぼくが自殺するということになっても、それはまったくだれのせいでもない、たとえばその明らかに最も身近かなきっかけがFの態度であるにしても。ぼくはすでに一度夢うつつにその情景を想い画いたことがある。最後を予想し別れの手紙をポケットに、彼女の住いにはいる。求婚してはねつけられ、手紙をテーブルにおきバルコンへ赴く。みなは急いでかけつけて抱きとめるが、身をもぎ離してバルコンの手すりに手をかけ、飛び越す、手を片方ずつ離しながら。手紙にはしかしこう書いてある——ぼくはFのせいで身を投げるのだが、ぼくの求婚がうけ容れられたところでぼくにとって何も本質的なものは変らなかつただろう、と。ぼくは飛び降りることが必要なのだ。別な和解の道は見つからない。Fはたまたまぼくの命運をはっきりと教えてくれる機縁となった人なのだ。ぼくは彼女なしで生きることはできない、それだから飛び降りなくてはならないのだ (ich bin nicht fähig, ohne sie zu leben, und muß hinunterspringen), しかしぼくは——そしてFもこのことを予感しているが——彼女とともに生きることもできないだろう (ich wäre aber — und F. ahnt dies — auch nicht fähig, mit ihr zu leben)。なぜ今夜をそのことにふり向けないのか、今夜両親の夕べに、人生とその諸条件のでっちあげ (Schaffung) について弁ずる者たちがぼくの前で臆面もなく式辞を述べたてていた——しかしぼくは、いろいろな表象を創りそれを頼りに生きていながら、現実には完全に人生のなかに巻きこまれており、(aber ich halte mich an Vorstellungen, ich lebe ganz verwickelt ins Leben), そんな真似はしないであろう。ぼくはぜんぜん冷静だ。シャツがこの首のまわりでぼくを圧しつめていることがもの悲しい。糞、いまましいことだ。ぼくは霧の中で喘ぐ (schnappe im Nebel)。」(T360 f)

一体どうしたらいいのだ! これでは救いも脱出も起り得ないだろう。命を断つことも出来ず、プラハの霧の中に喘いでいるカフカの心情風景を窺いみて、なるほど、われわれも亦、

ここに生きているな、ということほどの意味を感じとればいいのだと思う。そうして更には、『猟師グラクス』の理解のための前駆資料として、Fとの五年にわたる複雑な曲折にみちた関係^④が公式的に散文詩風に現れたものとして、ここに呈示はしておきたい。

就中、「この自殺行は、絶望的な事態であるにもかかわらず自虐による自慰の甘えをまともっており、処女作『死刑宣告』(『Das Urteil』1912年9月22—23日)の結びの自殺行と酷似している。みんなのとめる手を振りきることの甘美な悲傷感に最大の眼目が置かれている^⑤」というよりは、ウェイトをわれわれはその後の方にかけていたのである。むしろ、『死刑宣告』と酷似しているのではなくして、これはわれわれが前稿^⑥で指摘しておいたとおり、Pasleyがユルゲン・ポルンの研究によってわかっている事として述べてある、「カフカは自作を再検討するとき、作品としてのまとまりを第一に考え、また作品の創造過程を執拗に追体験する習慣があった」という、その執拗な追体験の習慣がもたらした俗な典型のひとつではあるまいか!

「夢うつつに自殺するその情景を思い画いた」(Ich habe mir selbst schon einmal im Halbschlaf die Szene vorgestellt)とき[その情景は以下関係文章ですべて括られる]、一夜にして稿の成った、書き手に宿命的ともいうべきつよい自信を与えることになったあの、『死刑宣告』の結びの自殺行為^⑦は、カフカの文学的パターンとして定着し、胎内器官のなか深く棲みついて肉化しているのであり、夢うつつであれば尚のこと、一度ならず、そのイメージが思いのまま浮び出てくるのは自然であろう。まして、この小説はFとの手紙による交際が始まり[1912年9月20日]かけたとたんに、Fが機縁となり、Fにささげて(Für F)創られてもいることを考え合せたとき、この同じFの態度が直接のきっかけで演じられる‘自殺行’の類型化は、一種の(落語の)枕であり、〈日記〉の主要な観点は後の方にずれ込んでいることはもはや明らかであろう。〈日記〉の全文に改めて目を通したうでこのことを考慮すれば、「自虐による自慰の甘え」から来る「甘美な悲傷感」などどこかへ吹き飛んでしまう筈である。「ぼくはぜんぜん冷静な(ich bin ganz kalt)」のでもである。

そうして、カフカの正念場はまさしく、この簡単な遺書の内容にいつしか移っているのだ——「ぼくはFのせいでは身を投げるのだが、ぼくの求婚がうけ容れられたところでぼくにとって何も本質的なものは変らなかつただろう」(In dem Brief aber stünde, daß ich F.s wegen zwar hinunterspringe, daß sich aber auch bei Annahme meines Antrages nichts Wesentliches für mich geändert hätte,)という…。「ぼくにとって本質的なもの」とはカフカをして言わしむれば、「ぼくの内なる実存のおそろしいまでの不確かさ」(Die schreckliche Unsicherheit meiner innern Existenz 3. Mai. 1913, T304)とでもいう外にあるまい。この“Unsicherheit”〈不確かさ〉の語彙は、註^⑧にも顔を出している(ぼくの〈不確かな〉頭脳、F、役所の荒廃、書くことが体力的に出来ない、しかも書くことがどうしてもやめられない)この1913年5月2日の〈日記〉にまつわる述懐を、本章頭書に述べられている(1914年2月15日の)〈日記〉のなかでは、次のコマ(,)をとり去って[mein unsicher Kopf, F.]はつきりと関係文章でこのFを説明して[Das Heft fängt mit F. an, die mir am 2. Mai 1913 den Kopf unsicher machte]いるのだ。このようにして〈「不確か」〉unsicher《というかわりに、もっとひどい言葉をつかうなら(wenn ich statt 《unsicher》 ein schlimmeres Wort nehme),このノートをそのFという始まりで終えることもできる〉というこ

との真意は、前稿〈獵師グラックス〉(1)の罅みにならえば⁹⁹、F=unsicher=meine innere Existenz (=Ich) という等式が成立つということであり、夜となく昼となく〈F〉のことで頭が充満している。だがその反面、そのことを忘却して孤独にもなりたい、そのように強烈な願望¹⁰⁰の言わせる、アンビバレンツな、カフカに特有の二義的表現技巧とみてとれぬことはないであろう。

III

さて、ここでわれわれは、前章に呈示した二つの〈日記〉から更に問題を具体化する作業に入り、〈F〉の問題を一歩進めながら本題の〈グラックス〉に近づきたい。

先ず、1914年2月14日(土曜日)の行動を一瞥し直してみよう。——午後散髪をすませ1) 帰ってからBl宛に手紙を書く2)、それよりマックスの新居を訪ねた3) あとの記述は、両親の夕べ4) へと一足飛びに飛んでいる。この席にはLudwig WinderやOskar Baumという友人とともにMax Brodも勿論招待を受け、その夜の帰途、カフカが黙っているのでマックスがこぼし6) たのである。自殺の欲求7) は、前日の〈日記〉の記述を、ここで再び追体験しているのであろう、マックスにも口外しない。床に就いても眠れずに悶々10) としているのは、家にも事務所にもFの書簡が来ない11) せいなのだ。そうして、〈夜どおし仕事にあてることが出来る筈の(T450)〉土曜の夜の最後を床のなかで、再び、Bl宛の手紙をフランツ・ヨゼフ駅で投函12) した事実を思い出し、自分に言いきかせてもするようにしてここに確認しないわけにおられない、ということだろうと思う。つまり、12) は2) に直接つながって行われた行為と考えなくてはならないだろう。二度までも繰返されるBl宛の手紙とは一体どんなものか、『フェリツェの手紙』(『Briefe an Felice』)を繰ってみると、この日、1914年2月14日にBlへかなり長文の書簡が、一通だけ書かれていることが分る¹⁰¹。

翌15日、ひとりで2時間ばかり、冬の寒いプラハ市内を歩き廻¹⁵) たあと、金曜にFの住まうベルリンへ行くことの決意16) が出てくる。黙っていて家で、母親から同情と援助をうまく引き出そうとする試み20) なども、按ずるにFとの求婚[als Freier, 14日の日記に前出(T360)]を固めるにつれて派生する事柄に係っているように見える。註(1)に照らしても明らかに判るように、2月28日(土)にベルリン行は決意どおり実現する。〈カフカとの結婚に異論のあるFeliceと3月1日までベルリンで話し合う〉とあるのがそれである。

最初の決裂(1913年9月)から、Bl嬢の仲立ちで文通の復活した結果、最初の彼等の出逢い(1912年8月13日)から2年にしてとも角も結婚に踏み切るに到るのが[女性、いや、もっとはっきり言って、結婚は、おまえが対決すべき、人生の代表者である。(H 118)], このベルリン行の約2ヶ月あと、4月12日から5月末[註(1)参照]にかけ、両家が正式に接触するまでに進展をみせ、婚約成立のかための日(Empfangstag)がベルリンのBauer家で翌6月1日に祝われた。と思う間もなく7月12日には、早くもGrete Bloch, Feliceの妹Ernaとカフカの友人で医者で文筆家のErnst Weiß立ち会いの下、ベルリンの〈アスカーニッシャー・ホーフ〉ホテルで話合いの応酬があった後、婚約は実を結ぶことなくあっけなく解消する。これが世に云うところの、第一回の婚約をめぐる一連の出来事の顛末である¹⁰²。[7月28

日にはオーストリア帝国はセルビアに宣戦布告し、8月2日に〈ドイツがロシアに宣戦を布告して〉第一次世界大戦が勃発し、第一章 p.116 参照 (T418) 以後、8月より『審判』を主とした創作力がにわかにならなくなり、第I章で見たように、またいつとなく徐々に枯渇する、こうしたパターンが繰返されてゆく。

どうして、このような状況に二度までも己れを追い込み、または追い込まれる事態 [1917年7月初めは二回目の婚約をし、同年12月末同じく最後にそれを解消する] が、同一女性をめぐる生じたのか。傍目には響盛を買うに違いない何とも説明のつきかねるこの事態を、カフカ自身をして語らしめるのがまた最も効果があり、適しているように思われる。非論理の論理と言おうか、彼独自の言わば消去の弁証法 (dialektikē) の思考の跡をも垣間見ることが出来る点でも亦貴重な資料が残されている。それは何か？ やはりそれはわれわれが試みてきた〈日記〉であって、1914年3月9日～14日の日付のなかに含まれる、かなりな長文に類する (T364, 369) 反省録である。折よくも〈婚約を解消〉 (Lösung des Verlöbnisses) した現段階で (1914年7月12日)、逆行して逆に眺めかえして見てみることは、この場合一層の印象を深め、その核心を会得するうえで何程かの効果があると考えられるのだ。というのもこれから読み進めてゆこうとする〈日記〉を書いているところは、昨年9月の最初の決裂を反省しながら、グレーテ・ブロッホの仲裁で、再び Felice との文通が復活し、浄福な結合を求めて一方的に揺れ動く人間関係の途上にあるということ。こうした両面からの興味も加わるからであろう。便宜上以下11ヶ条に分つ第一の設問の仕方そのものからして、すでにいかにもカフカらしい。

1) 〈ここにいてぼくは、Fを忘れないであろう。それゆえ結婚しないであろう。それはしっかりきまっているか?〉 (Ich werde hier F. nicht vergessen, daher nicht heiraten. Ist das ganz bestimmt?)

この設問に答えて彼は、結婚しない自分のこころの固さを示し、「そう判断できる」 (Ja, das kann ich beurteilen) といい、「31才にもなり、Fを知ってかれこれ2年になる。だからもう見通しをつけねばならぬ」と切り出すのだ。己れの生き方 (Lebensweise) は「Fがかりにぼくにとってそうした意味をもたなくても、彼女を忘れることができないといった種類のものなのだ。ぼくの生き方の単調さ、一様さ、快適さ、そしてその依存性が、一旦ぼくの坐りこんだ場所にそのまま無条件にぼくを縛りつけている」のである。かくして、やがては老いて行く、変化は益々しくくならぬ (Endlich altere ich doch auch, Umwandlungen werden immer schwerer)。こうして絶えず見込のない大きな不幸を「ひきずりながら梯子段を何年となく昇って耐えている限り、益々みじめな孤独な人間になって」 (ich würde mich auf der Gehaltsleiter und in den Jahren fortschleppen und immer trauriger und einsamer werden, solange ich es eben überhaupt aushielte) 行くだけだ。〔〈グラクス〉物語にやがて現れる「たえず上に通ずる大きな階段の上に居る」 (Ich bin, immer auf der großen Treppe, die hinaufführt) という抽象にまでも駆け登るはずの〈梯子段〉〕

2) 〈だがおまえは、このような生活を望んでいたのか?〉 (Du hast doch aber ein solches Leben dir gewünscht?)

ここで当然の成行として、結婚を仮定した公務員生活なるものの実体 (Das Beamtenleben

könnte für mich gut sein, wenn ich verheiratet wäre) が、俎上にのぼされる。「こうして暮せば、世間にも、妻にも、文筆に対してもすべての点でぼくのよい後楯が生じるのだ。無理して犠牲を求めることもなく、他面、安逸と自分ではどうにもならぬ体たらくな生き方に陥らない (ohne auf der andern Seite in Bequemlichkeit und Unselbständigkeit auszuarten) でもすむだろう。ぼくが妻帯しているならば、こんな事にいちいち神経を使う必要もない筈だ (denn als verheirateter Mann hätte ich das nicht zu fürchten)。だが、独身者としてのぼくは、こうした生活を終らせる (成しとげる) ことは出来ないのだ (Als Junggeselle aber kann ich ein solches Leben nicht zu Ende führen)」と。〔この設問2)のこの最後の表現の特徴には、前章末尾に触れた例の〈このノートをそのFという始まりで終えることもできる〉(ich kann mit diesem Anfang das Heft auch schließen) という表現のもつイメージを想起させるものがある。つまり、自分としては世間一般の上述のような〈結婚〉はしないし、また出来ないのだ。何とか〈試み〉たいのだが、それではもっと違う、純な結婚形式はないものかしら²⁴、という二義性を含みもつだろう。また「独身主義と自殺とは、似かよった認識の段階に立っている。自殺と殉教とは、決してそうではない。結婚と殉教とは、そうであるかも知れぬ (H87)」。或はまた、〈日記〉の1911年12月3日付「独身者の不幸」(Das Unglück des Junggesellen)なるアフォーリズム (T180) を参照]

3) 〈だがそれなら、おまえは結婚できたというのか?〉(Du hättest aber doch heiraten können?)

「ぼくはあのと結婚することが出来なかった。大そうFを愛していたにもかかわらず、ぼくのなかのすべてが結婚に叛逆した (alles in mir hat dagegen revoltiert, so sehr ich F. immer liebte)。ぼくをおしとどめたのは、主として文筆上の顧慮だった。ぼくはこの仕事結婚によって危険にさらされると信じたのだ。ぼくは正しかったかもしれない。しかし今のぼくの生活のなかではそれは、まさにこの独身者の生活 (das Junggesellentum) によって駄目にさせられている。ぼくは一年間何も書かなかったし、また、これからも書くことができないだろう。そうして頭のなかにあるのはこの書けないというただひとつの思いだけで、それがぼくをぼろぼろに食いちぎっている。あのとときには、こうしたすべてを吟味できなかった」と。

以上の反省は率直なカフカの、まぎれもない本音と言うべきであろう。「たまたま自分の命運をはっきりと教えてくれるきっかけとなったF」(F. ist zufällig die, an der sich meine Bestimmung erweist 第II章, p. 121 T361) に出逢った1912年8月以降12月までの間には、作品の方から溢れ出てくるごとく、9月『死刑宣告』が一夜にして成り、『失踪者』(『アメリカ』)にも手をそめ、11月、12月にかけては『変身』が完成するという、誠にめざましい創造作業が営まれていた。その反動のように1913年に入ると、枯渇状態に陥って、「一年間何も書かなかった」(Ich habe ein Jahr lang nichts geschrieben) し、「これからも書くことができないだろう」(ich kann auch weiterhin nichts schreiben) という危惧さえ抱く。と時を同じくするように〈独身者〉の安逸な、気儘な生活の反省が頭を占めはじめるのである。これまで Felice から二度にわたり結婚の申込 [1913年6月及び1914年1月] をかわされたカフカは、三月の終りになると、自分と結婚する意志を明言する気持が Felice にない場合、プラハを立去ろうとまで心に決めるのだ [その心組みとプランは、今書いている3月9日～14日の〈日記〉の8) に詳しく述べられる。また、註2)をも参照]。

結婚への障害が主として‘文筆上の顧慮’ (die Rücksicht auf meine schriftstellerische Arbeit) であり、結婚によってもたらされる危惧を抱きながら、いざ書けなとなれば、面目ない独身生活を清算しようという考が勢い自然にもち上ってくる。この身勝手なパターンをカフカの場合、特にわれわれは銘記しておかねばなるまい。そこでまた当然のように、

4) <なぜおまえは、それでもFを得ようとする希望をことごとく放棄してしまうのか?> (Warum gibst du alle Hoffnung auf, F. doch zu bekommen?) という、第4の設問が執拗にはじまるのである。

今まで (Felice に宛てた手紙のなかで) あらゆる自己卑下 (jede Selbstdemütigung) を試みてきたと自認するカフカは、返す刀でFの感情とその態度 [F.s Verhalten 第二章に既出。t 360 <自殺>の直接動機] とをこの場で手きびしく批判する。彼等が最も親密な関係にあった時代ですら、Fはぼくを大して好きではなく、精一杯の力をつくして愛してきてはいないのだという予感と危惧をほんの些細なこと (durch Kleinigkeiten) 感じていたとまで告白する。自己検証のためには心に触れることをことごとく書かぬわけにはいかない。その具体的な例を二、三聞こう。「ぼくの最近の二度の訪問のあとでは」[1914年3月9日に省察を試みている点から、1913年11月と1914年2月末日のこと。ベルリンはティーアガルテンの広大な公園でFを口説き落そうとした場面をここで再現してみせるのは後者の折である] (nach meinen letzten zwei Besuchen) 表面はいたって親しい間柄でdu呼ばわりもし、互に腕組みをしてベルリンの町なかを歩いている、Feliceは自分にたいしてある種の嫌悪 (einen gewissen Ekel) さえ感じていたかも知れないと思ひ、疑いだせば切りがなくなるのだ。

玄関で別れるとき、手袋をしたままでは満足できず、片方の手袋をはぎとって手にキスをしたとき、彼女が見せた敵意にみちた渋面 (die ganz feindselige Grimasse) を彼は忘れられず決裂の時の思出としてとりあげさえする。「あの膨大な手紙のやりとりの間に、彼女を駆りたてぼくの独特な気性が元で (durch meine Eigenheiten) すっかり不安を植えつけてしまって (Angst eingejagt)」いたことに気づきもするのだ。[少数のグレーテ・ブロッホの手紙をも含め、約760頁にわたる一巻のカフカだけの書簡集《Briefe an Felice》となった。先方からの手紙類は残念ながら残らなかつた] そうしてその合間には、こう挟むのを決して忘れない。「ぼくは、あなたを十分に愛しているから、あなたを妨げるようなものは何でも排除します。別人になって生れかわるから」(《)Ich habe dich lieb genug, um alles abzulegen, was dich stören könnte. Ich werde ein anderer Mensch werden.《)と。これより10日ほど前、ベルリンの公園で愛のおしつけのごときやくたいもない、云うところのこれが‘自己卑下’のひとつの科白であつたらう。

歯がうき出しかねない感じにつまされもする。が<手袋>の一件をみても、こうしたポーズがカフカのある折の性癖のひとつであつたとすれば、これは軽視し得ない体験素材といわねばならない。特にわれわれの知る限りその長篇三部作の性描写のなかで、『審判』のはじめの章 (隣室の Fräulein Bürstner に対しての執拗なまでのそれ) を思い起させる。何れにせよこれらは、彼とFとの関係の極めて分り易い原戯画と考へて差支えないであろう。次の設問のはじめには、「これは元来、口にしてはならないことだ」と暗に断わりさえしている。[こうしたカフカの特質が、最も典型的なかたちで現れたおぞましい(?) 見事な例証は、恐らく『父への手紙』(《)Briefe an den Vater《) 一篇であろう。『父への手紙』は書かれたままで、生前、父へは

渡されることがなかった]

5) 〈Fからみれば、おまえの以前の態度もやはり見込のないものに思えたのだろうか?〉 (Schien, von F. ausgesehen, dein früheres Verhalten nicht auch aussichtslos zu sein?)

理性結婚の相手としてFをみた場合、己れの今までの態度がそのようなものに値するかどうかの自己批判であろう。だがよくよく内省してみても、去年の夏の別れの際にさえ (selbst beim scheinbar letzten Abschied im Sommer) 愛を告白し、彼女のように黙りこくってはいなかった自分の〈愛〉 (meine Liebe zu ihr) の正当性を自己弁護しながら、Fの理由には、この愛が全く成就する見込がないというだけだ、とこの結婚の責任は一方的に彼女の方にあるといわぬばかり冷酷勝手につき放してかかるのである。「にもかかわらず、ぼくが (Fを) 待っているかもしれないのは、確かなのだ。しかし二重の絶望によって、ぼくはやはり (Fを) 待つことは出来ない (Trotzdem ist es richtig, daß ich warten könnte. Mit einer doppelten Hoffnungslosigkeit warten kann ich aber nicht:)」。「次々に消去してゆく論法に注目! 「カフカの世界」 (荒地出版) のなかで、‘カフカにおける抽象性について〈消去の論理〉 (小島信夫) をも参照」

つまり、Fがますます自分から遠ざかり姿を消してゆくのを見ていることと、それにともしない何とか自分を救う手だてが益々出来ない状態、救いがたい状態におち込んで行っているということ。これがとりもなおさず、彼のいう二重の絶望だ。〈自殺の欲求〉がここに於て想い画かれるわけであるが、想い画かれるに留まるだけで、頸のまわりに触れている冷やかなカラーの圧迫を霧の中にじっと見詰めているばかり (T361, 第II章)。「〈決意〉という意味でも、ぼくには自分の状況に、際限もなく絶望している権利がある」 (1922年, T563) という前稿 (「獵師グラクス」のポート・モチーフテクニスト考, P.79) で引用した口吻の底意も、このような絶望を経て、そのさ中に生れ出てきたことを思いみるべきであろうか。

それゆえに、「このことは、ぼくの内部のあらゆる極めつきの力のある悪に一番よく見合っているにもかかわらず、むしろそれゆえにこそ、ぼくが自分とともにためすことの出来る最大の冒険 (Es wäre das größte Wagnis, ……」)とも映ってくる。このなかにはカフカの所謂認識の闘い (Beschreibung eines Kampfes) のすべての根源がひそんでいよう。「獵に行くのを口実に、彼は家から遠ざかり、家をよく目にしておきたいのを口実に、いちばん骨の折れる山をよじのぼって行く。彼が獵に行くのだ (daß er auf die Jagd geht), と知っていなければ、われわれも彼をひきとめるのだが」 (H98) [Heft G (Das dritte Oktavheft): 18. Oktober 1917 bis 28. Januar 1918, Ein Symposium S.78, 80] というこの世界は、成立年代がわれわれの〈グラクス〉を越えていることは確実なのだが、まさしく、〈グラクス〉そのものの世界に違いないのである。

こうして、〈いちばん骨が折れる山をよじのぼって行く〉人のひとりである以上、「何がこれから起るのかさっぱり分らない」では、とも角も「現状の耐えがたさに対する論拠にはならない」 (man kann niemals wissen, was geschehn wird, ist kein Argument gegenüber der Unerträglichkeit eines gegenwärtigen Zustandes)。〔つまり、これは繫辞 (Kopula) ‘sein’ によって結ばれる二重否定文である。「これから起ることが分っていてこそ、現状の耐えがたさに対する

る論拠が生じ、それは生きてくる」という等式なのだ]それでは、ここで行動を起さねばならない。

6) <では、おまえは何をするつもりなのか?> (Was willst du also tun?)

「ぼくのこれまでに直面した最も強烈なこの人間的損失に対して、ぼくがなしうる最も強固な反撥手段で応ずること」(Gegenüber diesem stärksten menschlichen Schaden, der mich je getroffen hat, mit dem stärksten Reaktionsmittel, über das ich verfüge, vorgehn.)は、何よりも先ず彼の生れ故郷の〈ブラハを立去ること〉(Von Prag weggehn)に外ならなかった。すると当然、今の職を捨てることとなる。

7) <職はすてさるのか?> (Den Posten verlassen?)

半官半民の‘労働者保険局’という、この〈耐えがたいものの一部 (ein Teil der Unerträglichkeit)〉でもあるお役所は、恵まれた半日勤務ではあったが、カフカの表現をかりれば「安全確実」(die Sicherheit)で、「サラリーは十分」(der reichliche Gehalt)であるが、「一生が先がみえてしまっている」(das auf Lebensdauer Berechnete)こと「諸能力のぎりぎりでない緊張」(die nicht vollständige Anspannung der Kräfte)がある、というのだ。これはいつ、どこの社会でも今にはじまった人々の嘆きではないかも知れぬ、時代と場所をとび越え、われわれの生きている現代の様相に酷似する面でもあろう。「これらがより集まって、独身者としてのぼくが何ひとつ始めることなく、ただ苦悩と化す」原因をつくっている、と分析するのだ。[これらの無機的な言葉のすべては、この7)に限定するとすれば、第1章でわれわれがすでに〈日記〉を通して瞥見した‘夜の顔’を重ね合わせてみることによって、或いは、蘇生してくるかも知れない。文学作品のうち、この当時の役所なるものの影を最も濃厚にひく代表作として、世界文学の歴史に特異な存在を主張する『審判』があることは言うまでもない。が、それが裏面史をば忘れてはならぬであろう]

8) <では、おまえは何をするつもりなのか?> (Was willst du also tun?)

再度、同じ設問を自らに投げかけるカフカに残っている窓——脱出の窓口は、「少くともまずはドイツ、なかでも最も食べて生活していける可能性の多いベルリンへ行くこと (dort nach Berlin)」だけにしぼられる。得意の消去法をふんだんに駆使しながら、「オーストリアの法律家」(als österreichischer Jurist)を先ず消すといっしょに、浮び上る二つの都市——Prag と Wien とが、それぞれ否定的な反対理由で消滅し、オーストリア以外 [「それに、ぼくは語学の才がないし、肉体労働や商売はいたって下手なので」(und zwar, da ich kein Sprachtalent habe und körperliche sowie kaufmännische Arbeit nur schlecht leisten könnte)と正直に断わっている。これらの文構造の‘入れ子’の内部も、已然として否定的要素である]、ということになってはじめて〈ベルリン〉が頭を浮べるのである。[カフカ一流の、この地上から潜水している趣のある、慎ましかであるかと思えば、やはりしたたかな弁証法だ。]

かくしてベルリンへ出、文筆の腕を一番よく直接ふるえ、かなりの稼ぎも得られるジャーナリズムに投ずることが (Dort kann ich auch im Journalismus meine schriftstellerischen Fähigkeiten am besten und unmittelbarsten ausnützen und einen mir halbwegs entsprechenden Gelderwerb finden), 独立した自由な状態 (diese selbständige und freie Lage) を得られることになる。そこでならば唯一の幸福感 (das einzige Glücksgefühl) を育てることが可能であると信ずるに到る。この覚悟は、一本立の、言うところの作家となって、独立した稼業に入るという彼の生き甲斐をはじめて示したことを意味するだろう。

9) 〈だが、おまえは我儘で甘えん坊だ〉(Du bist aber verwöhnt.)。けれども「決してそうではないのだ。部屋ひとつと菜食の下宿だけで、ほかにはほとんど何もいらぬ」(Nein, ich brauche ein Zimmer und vegetarische Pension, sonst fast nichts) のだから。

この第9の設問は、これだけだ。極めて短かく、この設問だけには疑問符がないのが特長である。甘やかしてきた〈汝〉の我儘を自認しつつ、即座に下されるこの‘Nein’のものは極めて調子が高く、静かな響きをいつまでも後に残しているようにさえ思われる。カフカは菜食主義者(Vegetarianer)であつたらしい。書くための——生きんがための——ひとつの部屋と、棲家があれば、独り者(Junggeselle)のまま結構、ほかにはほとんど何もいらぬ。というほとんど(fast)の中味は何であろう？ それほとも角、この「ほかにはほとんど何もいらぬ」(sonst fast nichts)空漠を欲する〈無〉の境涯、この表現には〈グラックス〉と、その周辺に浮ぶ断片のいくつかに共通した流れの源が嗅ぎとれて、注目される。東洋の〈無〉とはかなり異質なそれが。

かくて最後に再び、Fが大きく影をおとしながら紙上に姿を見せてくる。

10) 〈おまえは、Fのいるせいで赴くのではないのか？〉(Fährst du nicht F.s wegen hin?)

この蠱惑的な否定の誘導審問に、自らをして否定で答えさせることはやはり、前問の‘Nein’とはいささか異なる、当りの弱い‘Nein’である筈だ。果せるかな、「上述の理由からベルリンを選ぶだけだが、むしろベルリンをFのため、そしてFをとりまく思い出の世界のために愛している。そこまでコントロールできる(目が届く)ぼくではない。ぼくがベルリンでFと出会うことも多分あるだろう。この出逢いがぼくの血からFを追い出すことに役立つなら、ますますよい。となればこれはベルリンの一層の余得というわけだ。」

Nein, ich wähle Berlin nur aus den obigen Gründen, allerdings liebe ich es wegen F. und wegen des Vorstellungskreises um F., das kann ich nicht kontrollieren. Es ist auch wahrscheinlich, daß ich in Berlin mit F. zusammenkommen werde. Wird mir dieses Zusammensein dazu verhelfen, F. aus meinem Blut hinauszubekommen: desto besser, es ist dann ein weiterer Vorteil von Berlin. (T369)

という結末。ここに到ってカフカの内情を腑分けしてみたいことは、9)のごとき状態のときには、Fの存在も〈ほとんど〉(fast)と化してしまうのが、ひとたび枯渇状態に陥ると、〈ほとんど何もいらぬ〉筈のこの‘fast’が俄かにふくれ上り、‘nichts’の場所を‘nur’と‘F’とに明け渡さなくてはおられぬような状態になるのであろう。

カフカは後年、第5のノート [《Das fünfte Oktavheft》(Heft E) 成立は〈グラックス〉物語の後で August/September 1917, Ein Symposion] の発端部で、いみじくも言っている。その大要は〈この世の代表者と彼の目するFと、わたしの自我とが、解決できない抗争をつづけて、わたしの肉体を父がひき裂くようにしてひき裂いた〉のだと。Friedel Pick が肺結核を見つけ出したのは、この年1917年9月4日のことである。(註(1)参照)。同じく〈日記〉の9月25日の終りには、〈ぼくたちがおたがいに振るいあつてきた鞭は、この五年のあいだに、痛い結び目の実を、たくさんみのらせてしまった〉

Die Peitschen, mit denen wir einander hauen, haben gut Knoten angesetzt in den fünf Jahren. (T534)

と、しょんぼり 'kritzeln' (柁目に引き搔く) し、三日あとの9月28日になると次のようにも書き留めている。

28. September. Grundriß der Gespräche mit F.

Ich: So weit habe ich es also gebracht.

F.: So weit habe *ich* es gebracht.

Ich: So weit habe ich dich gebracht.

F.: Das ist wahr.

(a. a. O.)

Fとの会話の見取り図。

ぼく——じゃあぼくが、こんなにしてしまったわけだ。

F——こんなにしてしまったのは、わたしよ。

ぼく——きみをそんなにしてしまったのが、ぼくなんだ。

F——ほんとね。

世界大戦が勃発したため、この脱出計画は実現せず、従って、〈唯一の幸福感〉を育てることはとうとう不可能になった。そうして、この世の代表者 (Die Welt - F. ist ihr Repräsentant - H132) である Felice なしで生きることはできず、彼女とともに生きることも亦できないであろう (そしてFもこのことを予感している) [既出第II章, p. 121 T361] 矛盾したこの〈ぼく〉の〈不確かな〉(unsicher) 在りようが、つきつめて行くと〈猟師グラス〉のわれわれの問題としてここにあらたに蘇ってもくるのである。

11) Bist du gesund? —Nein, Herz, Schlaf, Verdauung. (おまえは健康か? ——いや、心臓、睡眠、消化。)

この1914年3月9日~14日の日録の長い思考のうねりを切り落すようにして、上に書き並べられた三つの名詞——'Herz', 'Schlaf' そして 'Verdauung' は、第I章第II章でわれわれがとり挙げた (Herzschmerz) 〈胸の痛み〉 (Herzschwäche) 〈心臓衰弱〉とか (schlaflos) 〈眠れない〉とかあるいはまた (Verdauungsschwäche) 〈消化不良〉とかいう否定の字母のつかない、のっぺらぼうで、それだけに彼にとっては意味深い、透明度のある簡素な、ぶっきら棒な何とも据わりのよい終息! けれども見よ、そのものたちは拒絶の名詞 'Nein' を頭に深くまた被ってもいるのである。

——1979. 9. 30.

註

- (1) 1913年2月、『死刑宣告』(『Das Urteil』)を“Arkadia 年鑑”(プロート発行)に発表した Kafka は、その校正に際し、11日付の〈日記〉の冒頭で、次のような自己批評を下す。

— die Geschichte ist wie eine regelrechte Geburt mit Schmutz und Schleim bedeckt aus mir herausgekommen und nur ich habe die Hand, die bis zum Körper dringen kann und Lust dazu hat :

この短篇は、kafka にとって、おりものと粘液をつけて胎内から生れてた分身であり、本物の彼の生誕であった。創作という分娩作用を、8時間の陣痛に耐えぬき果した(1912年9月22日から23日にかけての夜、すなわち10時から朝の6時まで、一気呵成に書く。……まるで川のなかを遡っているようで、物語の筋が眼の前に展開して行ったときの物すごい緊張と喜びを味う。……a. a. O. S. 293。就筆速度に関していえば、〈猟師グラックス〉とは対蹠的な作品として注目すべき好例であろう)。それゆえ、肉のすみずみまで屈くことの出来る手をもっているのは彼だけであり、作品のなかに分け入ってみたいという愛着を珍らしく彼は示した。(同一著者による 信州大学工学部紀要 第19号 1965年12月〈カフカの『死刑宣告』に就いて〉を参照)

- (2) カフカの〈小説の書き出し〉に関する比喻は、更に以下のように続く。(T450)「……もっとも、自分の感じる絶望が、至当なものかそうでないかは、だれにも決して分ることはない。しかし、ある種の抛りどころをば、こうした熟慮が与えてくれよう。このような体験がなかったため、今までぼくはたしかに損をしてきた」と。

小説の書き出しを慎重に熟慮して、何度となくやり直しを試みた例として、前稿の〈グラックス考〉を上述の観点から見つめ直してみたなら、この抛りどころ(Halt)が何を意味するのかおぼろげに分る気もする。熟慮しすぎて失敗するということも多分にあるのだ。

- (3) M. Brod: Franz Kafka. Eine Biographie. (Frankfurt/M. 1962) S. 183.
 (4) F. Kafka: Tagebücher, a. a. O., S. 453 — Ich weiß nicht, warum ich diese Übersicht mache, es entspricht mir gar nicht !

こうした否定の要因を多分に含む(一種肯定的な)態度を保留した曖昧な断り書きは、前稿の冒頭(信州大学教養部紀要 人文科学 第13号)にも触れるところのある、あの〈遺言〉に結局のところ通じる口吻をもつ。

- (5) F. Kafka : H367~373 S. 367, Zeile 7 — [Fragment des]Unterstaatsanwalts[]及び Anmerkungen von M. Brod : H 453 — 「……ひじょうに多くのばらばらの原稿のなかから、以下に見られるような短篇〈検事補〉の断章をとり出し、まとめることが出来た。これは未完ではあるが、これまで保存されていたものよりも量が多い。はじめの部分が欠けている」

この欠けているはじめの部分だけを示す。—— …… überdrüssig geworden ist, Jagden auf Mißgeburten zu veranstalten, dann wäre allerdings der Bezirksrichter das erste Ziel. Aber sich über ihn zu ärgern, ist sinnlos. Darum ärgert sich auch der Unterstaatsanwalt nicht über ihn, er ärgert sich nur über die Dummheit, die einen solchen Menschen auf einen Bezirksrichterposten setzt. (……生まれ損ないどもを追いまわすことにももう飽き飽きした。となれば、第一の目標が地方裁判所長であることはいうまでもない。けれども、あいつに腹をたてるのも馬鹿げている。だから、検事補もまたあいつに腹をたてているわけではない。ただあのような男を地方裁判所長の要職にすえた愚劣さに腹をたてているだけなのだ)

- (6) 後年の F. Kafka の小品の傑作]Auf der Galerie[(「サーカスの立見席にて」 Januar/Februar

1917) が思い浮ぶシーン。この作は、短篇集『田舎医者』のなかの一篇である。

- (7) a. a. O., 16.10.'21 (T542) — 絶えず発端だという不幸。一切が発端にすぎず、発端でさえない、ということに就いては錯覚ももてないこと。それを知らずに、たとえばフットボールをやり、きついつかは「前に進もう」ともがく連中の愚かしさ。これは自らの愚かしさを、柩のなかに葬るように、自らのうちに埋葬している手合だが、これが真物の柩で、つまり運んだり、開けたり、こわしたり、とり替えたりできる柩なのだと思っている連中の愚かしさ。

彼の思考と生き方を示す文体の特長を知るためにも、原文の解説が更に必要であろう。

Das Unglück eines fortwährenden Anfangs, das Fehlen der Täuschung darüber, daß alles nur ein Anfang und nicht einmal ein Anfang ist, die Narrheit der andern, die das nicht wissen und zum Beispiel Fußball spielen, um endlich einmal »vorwärts zu kommen«, die eigene Narrheit in sich selbst vergraben wie in einem Sarg, die Narrheit der andern, die hier einen wirklichen Sarg zu sehen glauben, also einen Sarg, den man transportieren, aufmachen, zerstören, auswechseln kann.

- (8) — ところで、詩人との最初の出会いには、いったいどの作品が『審判』よりもふさわしかったのか、という問題です。そうですね、我々の読者はまず小品を知る機会があったほうが良かったと私は思います。こうした作品は決して断片というのではないのです。逆に、きわめて短く、きわめて飾り気がないにもかかわらず、驚くべき純度を備えており、こうしたものが対象なら、読者は混乱した諸々の期待で前もって苦められることはなかったことでしょう。読者はこうした作品をあるがままに読み、受け取ることができたでしょうし、これらから長篇への、そしてその正しい理解への橋を見出したことでしょう。(P.248)

- (9) この『村の学校教師』(「村の老教師」「田舎教師」の別名訳も見える)とは、後に編者の思い違いにより『巨大なもぐらもち』(『Der Riesenmaulwurf』)という表題に改めて残された未完の短篇のことである。晩年の三つの動物物語である『ある犬の探求』(『Forschungen eines Hundes』)、『歌姫ヨゼフィーネ、あるいはネズミ族』(『Josefine, die Sängerin』)、『巢穴』(『Der Bau』)の、これは先駆的モチーフを含む問題作となった。— a. a. O., B220~239 W. Emrich はその大著“Franz Kafka”のなかで、〈動物認識の可能性の問題〉(Das Problem der Erkennbarkeit der Tiere S. 146)なる一節を設け、a) b)の二項に分ち、本短篇に則してカフカの「科学批判」及び「社会批判」の両方面にわたる解釈を施している。因みに、そのはじめの部分載せておくことにする。[エムリッヒ：「カフカ論」(I) 志波一富・中村詔二郎訳 S.52 冬樹社] a カフカの科学批判 この物語『村の老教師』のなかでは、巨大なもぐらもちそのものに関してはほとんど何ひとつとして明言されていない。中心になっているのは、むしろ、いかにすればこの動物の生活形式を異論の余地なく「証明する」ことができるかという問いである。そしてこの問いは村の老教師という形姿に集中している。それゆえカフカはまたこの物語に『村の老教師』という表題を付けたのであって、このことは1914年の終りから1915年の始めにかけて書かれた彼の日記(T 449~454)から明白に読みとれるのである。刊行されている彼の作品に『巨大なもぐらもち』という表題が付されているのは編集者の錯誤によるものである。(P.242 f)

- (10) kritzeln ごしごし搔く；なぐり書きする、下手に書く(z. kratzen と同系か) [都文堂小独和による] — (V. i) klein u. schlecht leserlich schreiben; sinnlose Striche u. Schnörkel machen [Verkleinerungsform zu ahd. *krizzon* “einritzen”, vermutl. vermischt aus den Wurzeln germ. *kret-*: *krat-* (→kratzen)+germ. *kret-*: *krait-*: *krit-* “eine Linie ziehen” (→Kreis)] (von Wahrig: GDW) また、カフカが友人 Brod に ‘schreiben’ と言わずいつも ‘kritzeln’ と言っていた、という単語の文字—— ‘kritzeln’ を次の日記(T60; 20. August 1911)の記述と反映さ

せてみると、妙味を醸す。

—ぼくはこれを理解するはおろか、信ずることさえできない。すなわちぼくは、ただあちらこちらで一つの小さな言葉のなかに生きているばかりで、例えばその言葉の変母音（右の例の「押す」の《stößt》）のなかに一瞬のあいだ、無能な頭を空費してしまうのだ。（…Wort, in dessen Umlaut (oben) »stößt《 ich zum Beispiel auf einen Augenblick meinen unnützen Kopf verliere.）頭と尻尾の文字が、魚のようなぼくの感情の最初と最後だ（Erster und letzter Buchstabe sind Anfang und Ende meines fischartigen Gefühls.）。

- (ii) カフカ略年譜（主として1912～1917, Kafka Kommentar zu sämtlichen Erzählungen v. H. Binder, Winklar Verlag München 1975）—カフカが Brod の家で Felice Bauer と相知った1912年（8月13日）から、彼女がブラハへきて、最後に婚約を解消する1917年（12月末）までの足かけ六年にわたるやや詳しい Hartmut Binder (Kafka Kommentar S. 37～40) による略年譜を掲載する。Felice Bauer との関聯記事には、日付の頭部に・印を付した。

1912 18. Februar: Rezitationsabend von Jizchak Löwy, den Kafka organisatorisch betreut.

28. Juni-7. Juli: Ferienreise mit Max Brod nach Weimar, Margarethe Kirchner.

8.-29. Juli: im Naturheilsanatorium »Just-Jungborn« bei Stapelburg im Harz. Erste Augsthälfte: *Betrachtung* druckfertig gemacht.

• 13. August: erstes Zusammentreffen mit Felice Bauer.

• 20. September: Eröffnung des Briefwechsels mit Felice.

22.-23. September: *Das Urteil* entsteht.

25. September: Beginn der Arbeit am *Verschollenen*.

14. Oktober: Otto Stoessl sucht Kafka in Prag auf.

17. November-6./7. Dezember: *Die Verwandlung* entsteht.

4. Dezember: Kafka liest öffentlich das *Urteil* während eines Autorenabends der Prager Herder-Vereinigung.

1913 18. Januar: Zusammentreffen mit Martin Buber in Prag.

24. Januar: vorl. Aufgabe d. Arbeit am *Verschollenen*.

1. März: Beförderung zum Vizesekretär.

• 23.-24. März: Zusammentreffen mit Felice in Berlin.

7. April: Beginn der Gärtnerarbeit in Troja bei Prag.

• 11.-12. Mai: in Berlin bei Felice.

2. Juni: Rezitationsabend Jizchak Löwys in Prag.

28. Juni: erste Begegnung mit Ernst Weiß in Prag.

6.-13. September: gemeinsame Reise mit Direktor Marschner nach Wien zum Internationalen Kongreß für Rettungswesen und Unfallverhütung; Besuch des XI. Zionisten-Kongresses; Zusammenkunft mit Albert Ehrenstein, Lise Weltsch, Felix Stössinger und Ernst Weiß.

14. September: Reise über Triest nach Venedig.

15.-21. September: Venedig, Verona, Desenzano am Gardasee.

• 22. September-13. Oktober: im Sanatorium Dr. v. Hartungen in Riva. Liebe zu G. W., der Schweizerin.

• 1. November: persönliche Bekanntschaft mit Grete Bloch, Felicens Freundin.

- 8.-9. November: in Berlin bei Felice.
- 11. Dezember: Kafka liest öffentlich in der Toynbeehalle aus Kleists *Michael Kohlhaas*. Ende Dezember: Ernst Weiß in Prag.
- 1914 Februar: Robert Musil fordert Kafka zur Mitarbeit an der *Neuen Rundschau* auf.
- 28. Februar-1. März: Zusammenkunft mit Felice in Berlin, die Einwände gegen eine Ehe mit Kafka hat. Besuch bei Martin Buber.
- 12.-13. April: inoffizielle Verlobung mit Felice in Berlin. 30. Mai: Reise nach Berlin in Begleitung des Vaters zur offiziellen Verlobungsfeier.
- 1. Juni: Empfangstag bei der Familie Bauer.
- 12. Juli: Aussprache im Hotel »Askaniſcher Hof« in Berlin in Gegenwart von Grete Bloch, Felicens Schwester Erna und Ernst Weiß; Lösung des Verlöbniſſes.
- 13-26. Juli: Urlaub, zuerst in Travemünde, dann gemeinsam mit Ernst Weiß und Rahel Sansara im dänischen Ostseebad Marielyst.
- 3. August: erstmalig allein in der Wohnung Vallis in der Bilek-Gasse.
- Zweite Augustwoche: Beginn der Arbeit am *Prozeß*.
- September: allein in der Wohnung Ellis in der Nerudagasse (wahrscheinlich bis Februar 1915).
- 5.-18. Oktober: Kafka nimmt Urlaub, um den *Prozeß* zu fördern; in dieser Zeit entsteht ein Kapitel des *Verschollenen (Das Naturtheater von Oklahoma)* und die Erzählung *In der Strafkolonie*.
- Ende Oktober: Wiederaufnahme der Briefverbindung mit Felice.
- 18. Dezember: Arbeit am *Dorfschullehrer* begonnen.
- Weihnachten 1914: mit Max Brod und seiner Frau in Kuttendorf.
- 1915 6. Januar: *Dorfschullehrer* abgebrochen.
- 17. Januar: Arbeit am *Prozeß* aufgegeben.
- 23.-24. Januar: Zusammentreffen mit Felice in Bodenbach.
- 8. Februar: Kafka beginnt an *Blumfeld, ein älterer Junggeselle* zu schreiben (die Arbeit zieht sich bis März/April hin).
- 10. Februar: eigenes Zimmer in der Bilek-Gasse.
- 1. März: eigenes Zimmer in der Langengasse im Haus »Zum goldenen Hecht«.
- Ende April: Reise mit Elli zu ihrem Mann, der als Soldat im ungarischen Karpatengebiet stationiert ist.
- 23.-24. Mai: mit Felice und Grete Bloch in der Böhmiſchen Schweiz.
- Juni: mit Felice in Karlsbad.
- 20.-31. Juli: Aufenthalt im Sanatorium Frankenstein bei Rumburg (Nordböhmen).
- 1916 14. April: Robert Musil besucht Kafka in Prag.
- 13-15. Mai: Dienstreise nach Karlsbad und Marienbad.
- 3.-24. Juli: in Marienbad, bis 13. zusammen mit Felice. Ende Juli: Kafka wird ein Lektorat im Kurt Wolff Verlag in Leipzig angeboten.
- 10.-12. November: mit Felice in München, Kafka trägt an einem der Abende für neue Literatur in der Galerie Goltz *In der Strafkolonie* vor; Begegnung mit Gottfried Kölwel, Max Pulver und Eugen Mondt.

26. November: Seit diesem Tag arbeitet Kafka in dem von Ottla gemieteten und hergerichteten kleinen Häuschen in der Alchimistengasse; bis Ende April 1917 entstehen Erzählungen, die im *Landarzt*-Band veröffentlicht sind.
- 1917 1. März: Bezug einer Zweizimmerwohnung im Schönborn-Palais in der Marktgasse, wo Kafka aber nur von der Berufsarbeit ausruht und schläft.
- Frühjahr/Frühsummer: Kafka beginnt Hebräisch zu lernen.
- Anfang Juli: zweite Verlobung mit Felice, die nach Prag kommt; gemeinsame Reise zu einer Schwester der Braut über Budapest nach Arad. Kafka kehrt allein über Wien zurück; Zusammentreffen mit Otto Groß, Anton Kuh und Rudolf Fuchs.
23. Juli: Kafka begeistert sich für einen Zeitschriftenplan von Otto Groß.
- 9./10. August: Blutsturz.
- Ende August: Aufgabe des Häuschens in der Alchimistengasse und der Wohnung im Schönborn-Palais. Kafka lebt wieder bei den Eltern.
- 4. September: Prof. Friedel Pick stellt eine Lungentuberkulose fest.
12. September: Kafka fährt nach Zürau in Nordwestböhmen, wo Ottla ein in Familienbesitz befindliches landwirtschaftliches Gütchen bewirtschaftet. In der Folgezeit Kierkegaard-Studien; Aphorismen.
- 20.-21. September: Felice in Zürau.
 - 25.-27. Dezember: Besuch Felices in Prag, wo Kafka von Weihnachten bis Anfang Januar 1918 weilt; Lösung des Verlöbnisses.

(12) a. a. O., 2. 5. '13 (T303)

2. Mai. Es ist sehr notwendig geworden, wieder ein Tagebuch zu führen. Mein unsicher Kopf, F., der Verfall im Bureau, die körperliche Unmöglichkeit zu schreiben und das innere Bedürfnis danach. [この前の日記は2月28日付で、この年度の〈日記〉にしては珍らしく2ヶ月の空白がある]

(13) a. a. O., 15. 2. '14 (T362)

—わたしはヴェルチュ（カフカの友人で思想家, Felix Weltsch のこと）のところで、興奮している母親をなぐさめようとして言った。「わたしもこの結婚で、フェーリクスを失うことになります。結婚した友だちというのは、もう友だちではありませんからね。」フェーリクスは何も言わなかった。もちろん何か言えるはずもなかったのだが、彼は何か言おうとさえもしなかった。[カフカ 実存と人生 辻理訳 白水社 1970]

(14) 『フェリーツェへの手紙』が全集に加えられて以来、彼女の写真が公開された。カフカは目のことは書いていないが、写真で見ると彼女は顔立ちにふさわしい物悲しい忍従の目をしている。顔はまさにカフカが記したとおりだ*。口の悪い者なら女中面というだろう。性的魅力はない。カフカのフェリーツェに魅かれた理由が、なによりもまず「浄福な家庭生活」の可能性からであったことは明瞭である。『フェリーツェへの手紙』は、この1912年9月20日から1917年10月16日まで、6年に及ぶ膨大な量である。これはまだひとが文通を人間的接触の最も重要な場と信じていた時代であり（この習慣がいつごろから急激に意味を失ったかは、興味ある問題だ）、とくにカフカは情熱的な手紙執筆者であって、10月23日初めてフェリーツェの返事があってからは、それは堰を切ったように二通、三通と、たちまちとめどもない流れとなって流れだした。この複雑な曲折にみちた関係を正確に伝えるには、何百ページも必要とするだろう。だが、その基本的なパターンはつねに同じであるように見える。結婚による自己救済の願望は、人間的接触が重なるにつれ、カフカには負担および精神的枯渇と

なり、相手には苦悩となり、別れと解消がくる。それから短い、孤独のなかの充溢のあとに、また枯渴、それから結婚による自己救済の願望、そしてまた同じ経過。それはもう全く同じことの果てでもない繰り返しといった印象を与える人間関係である。[「カフカの世界」(辻理篇)荒地出版 昭和52年のうち、〈三つの愛〉(フェリッツェ、ユーリエ、ミレナと)*印の訳とも中野孝次]

*「F・B嬢。8月13日プロートの家へいったとき、彼女は食卓に向かっている、ぼくには女中みたくに見えた。彼女が何者かことはすこしも気にならないで、すぐその存在と折り合った。虚しさのあからさまにでている、骨ばった虚しい顔。あらわな首筋。だぶつとしたブラウス。彼女はひどく世帯じみた着こなしをしてるように見えた、実際はそうじゃないってことはあとでよくわかったけれども。……ほとんど潰れた鼻。ブロンドで、すこしこわい魅力のない髪、がっしりした顎。そばの椅子に腰かけたときに、ぼくは初めて彼女をとっくりと見た、そしてもう断乎たる判断をもった。」(1912年8月20日の日記)

- (15) 「フランツ・カフカの生涯」(谷口茂)潮 1973 P.264 (但し、『判決』とあるのは『死刑宣告』と改めた)
- (16) 信州大学教養部紀要 第13号 昭和54年3月「猟師グラクスの」ポート・モチーフテキスト考——カフカの創作過程の試み(1)——の註(6) P.97参照。
- (17) a.a.O., »Das Urteil« (für F.) (E 67f)
 ……Aus dem Tor sprang er, über die Fahrbahn zum Wasser trieb es ihn. Schon hielt er das Geländer fest, wie ein Hungriger die Nahrung. Er schwang sich über, als der ausgezeichnete Turner, der er in seinen Jugendjahren zum Stolz seiner Eltern gewesen war. Noch hielt er sich mit schwächer werdenden Händen fest, erspähte zwischen den Geländerstangen einen Autoomnibus, der mit Leichtigkeit seinen Fall übertönen würde, rief leise: »Liebe Eltern, ich habe euch doch immer geliebt«, und ließ sich hinabfallen. In diesem Augenblick ging über die Brücke ein geradezu unendlicher Verkehr.
- (18) 同上紀要 P.78参照。
- (19) Iの終りに二つの〈グラクスの〉背景を提示した。その一つの〈F〉についてはIIIに於て更に問題を追いつめて行くであろう。他の一つ(Ruhe)については、孤独(Einsamkeit)というカフカの中心テーマに結局のところしぼられると思う。それゆえ(Ruhe)と本題との関聯にちなんで、さきに〈ポート・モチーフ考〉で資料もれた「Riva」に関する若干の〈日記〉を、ここに収録した。——(T306) 1. 7. '13: Der Wunsch nach besinnungsloser Einsamkeit. Nur mir gegenübergestellt sein. Vielleicht werde ich es in Riva haben. (7月1日。意識のない孤独への願望。ただ自己にだけ相対していること。リヴァではそれが得られるかもしれない)
 (T309) 20. 7. '13: Unten auf dem Flusse lagen mehrere Boote, Fischer hatten ihre Angeln ausgeworfen, es war ein trüber Tag. Am Quai geländer lehnten einige Burschen mit verschränkten Beinen. (7月20日。下の流れに小舟が数艘浮んでいた、漁師が釣糸をたれていた、空はどんよりしていた。突堤の柵には、少年が二、三人脚を組み合わせてそれにもたれていた)
 [(T310ff) 21.-22.7.'13: Zusammenstellung alles dessen, was für und gegen meine Heirat spricht:] (ぼくの結婚に対する賛否すべての総括)
 (T313) a.a.O.: Ich fuhr mit/einem Boot in eine kleine natürliche Bucht ein. (ぼくはボートで、とある小さな天然の入江のなかへ漕ぎ入った)
 (T321) 15.10.'13: Der Aufenthalt in Riva hatte für mich eine große Wichtigkeit. Ich verstand zum ersten Male ein christliches Mädchen und lebte fast ganz in seinem Wirkungskreis. Ich bin unfähig, etwas für die Erinnerung Entscheidendes aufzuschreiben.

…（T325）前稿のP.87を参照。

- (20) Bl.こと Grete Bloch（グレーテ・ブロッホ）は Felice Bauer と同業の速記タイピストでベルリンで知りあい、同じくユダヤ人。このとき22才、F.B.より5才、Kafkaより9才年下であって、このころプラハ経由でウィーンに居を移していた。カフカとフェリーツェとの関係の行き詰まりを打開する仲介役を買って出たものの、両者の間はFをなかに極めて微妙〔確証はないが、幼くして死亡した彼の子供がいたと後に彼女自ら名告り出た、という。カフカがインポテンツではなかったある種の傍証にはなる筈〕であった。この手紙のなかでも遠ざけながら仲介者としての労をねぎらう文句を前半に長々と添え、2月9日に舞い込んだFからの葉書は、グレーテが勧めたためにFから屈いたのではないと分って、それをしぶしぶ了承しているといった内容のものである。正月以来、しばらくぶりでフェリーツェの沈黙が破れたのだ。もの珍しいFeliceの葉書（カフカはBl嬢へはFの便りの内容を知らせるがBl嬢から届くkafka宛の便りはFには黙っているという密約で）をBl宛の手紙の終りに書き添えている、これをわれわれも録しておく。

……Ich schreibe sie（註：F.s Karte）hier vollständig ab, sie ist mit einem schlechten Bleistift geschrieben und wird bald nicht mehr lesbar sein: 》Berlin, Anhalter Bahnhof, am 8. 2. 14, Abend 10,30.

Franz, ich sitze hier im Wartesaal und hole meine Schwester von der Bahn, die aus Dresden ankommt. Lasse mich Dir viele herzliche Grüße senden. Du hörst auch wieder einmal mehr von mir. Ich mußte diese Karte schreiben. Innigen Gruß, Felice.《

尚、谷口茂氏（前出）の追跡によれば（P.262）、カフカはBl嬢への手紙を書いたままで投函をためらっている〔グレーテを扱いかねる1月26日の日記〕事実もある。従って、本文12）のBl宛の手紙の投函は、昨日の午後2）の直後ではなく、就寝前の夜中あるいは翌15日の午前中とも解釈し直すことが可能である。こうとなれば、行動は時間どおり順を追うことになって妥当かもしれない。とかく疑い出せば（それだけ推定を働かせれば）切りがない〔例えば、14）のMutterも誰の母か疑わしい。上述の時間順序に基づけば、この母はG.の母との推測も成立つ。つまり、G.の家で食事をよばれた？〕。推理にはそれ相当の資料を集めてかからねばならぬ。

- (21) カフカ略年譜追補（1912～1914, 'Briefe an Felice' hg. v. Erich Heller und Jürgen Born S.Fischer Verlag S.767ff, 註(1)と比較対照）

1912

22./23. Sept. Niederschrift der Erzählung 》Das Urteil《 in einer Nacht.

14. u. 18. Okt. Briefe Kafkas an Sophie Friedmann: da F ihm nicht antwortet, bittet er ihre Verwandte um Fürsprache.

23. Okt. Antwort F.s nach der 》dreiwöchigen Wartezeit《.

15. u. 22. Nov. Max Brod schreibt an F. über Kafka.

1913

7. April F.vertritt vom 7.-17. April ihre Firma auf einer Ausstellung in Frankfurt am Main.

10./16. Juni. Brief, in dem er F.zum erstenmal um ihre Hand bittet.

August F. verbringt ihren Sommerurlaub (1.-17.) in Westerland auf Sylt.

29. Okt. Wiederaufnahme des Briefuechsels mit Felice, der seit dem 20. September ruhte.

8./9. Nov. Kurze Zusammenkunft mit F. in Berlin; Besuch bei Ernst Weiß.

Mitte Dez. Ernst Weiß sucht F. in ihrer Firma auf und bittet im Auftrage Kafkas um eine Erklärung für ihr langes Schweigen.

1914

Anfang Jan. Kafka bittet in einem Brief erneut um ihre Hand; ausweichende Antwort Felicens.

Ende März Kafka entschließt sich, Prag zu verlassen, falls F. sich nicht bereit erklärt, ihn zu heiraten.

12./13. Apr. (Ostern) Zusammenkunft in Berlin; in offizielle Verlobung; F. erklärt sich bereit, im September zu heiraten.

1. Mai F.s Ankunft in Prag; gemeinsame Wohnungssuche. (Mitte Mai mietet Kafka eine 3-Zimmerwohnung in der Langengasse 923/5.)

26. Mai Kafkas Mutter und seine Schwester Ottla treffen als Gäste der Familie Bauer in Berlin ein.

30. Mai Reise nach Berlin — in Begleitung des Vaters — zur offiziellen Verlobungsfeier. Am 1. Juni (Pfingstmontag) Empfangstag bei der Familie Bauer.

Mitte Juni Ernst Weiß kommt nach Prag und kehrt am 19. Juni wieder nach Berlin zurück.

2. Juli Entschluß, am Wochenende 11/12. Juli zu einer Aussprache nach Berlin zu fahren.

(2) Hartmut Binder: »Der Jäger Gracchus« — Zu Kafkas Schaffensweise und poetischer Topographie, Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft 15. Jahrgang 1971 (Alfred Kröner Verlag Stuttgart) S. 421

……So entsteht hinsichtlich der Existenzverwirklichung dieser Figur ein Schwebezustand, der genau die Problematik des *Jäger Gracchus* und der biographischen Situation Kafkas zum Zeitpunkt der Entstehung dieser Urfassung spiegelt: Denn Ende August 1916 war eine Lage eingetreten, die den im September 1913, August 1914 und Winter 1916/17 herrschenden Verhältnissen grundsätzlich gleichartig war. Der Dichter wollte nämlich damals die Beziehung zu Felice plötzlich abbrechen und — dies war auch im August 1914 sein geheimer Wunsch — Soldat werden.

カフカが Felice との長い交際中、その関係を急に断つ四つの時期を示す。このあとの創作量は遅しい。本論考で問題になっているのは、September 1913 を経 August 1914 以後にわたる間である。この相関関係は次の Ende August 1916 から Winter 1916/17 への昂揚期へとパラレルに雪崩れ込む。〈グラックス〉物語はこの両群にまたがる間に生じて、こうした一切のものの中間地帯という性質を創造過程のうえでも持っているのではあるまいか。

(2) (a) M・ブランショ／栗津則雄・出口裕弘訳 文学空間 現代思潮社 1962 [(本質的孤独) の章のうち(「日記」への依存)より (P.21 f)] 「日記」への依存……日記は、本質的には、告白ではない、己れ自身の物語ではない。備忘録なのだ。作家は、何を思い出さねばならぬのか? 彼自身である。……日記への依存は、ものを書く人間が、真にその日その日であり真に相次ぐものであるその日その日の、幸福や合目的性と、絶縁したがることを示す。日記は、書くという運動を、時間の中に、日付けを打たれおのれの日付けに守られた日常的なもののつつしみ深さの中に根づかせるのだ。……日記を書く作家があらゆる作家中もっとも文学的だなどということが起るが、おそらくそれは、彼等が、文学が時間の不在の幻惑的な君臨であるとき、そのようにして文学のかかる極限を避けているからだ。

(b) 〈日記〉に関する Kafka の意見 (23.12.11, T202) は、本論考に則しても大へん貴重な示唆を多く含む。

——日記をつける利点のひとつは、はっきりと心を鎮めていろいろな変遷を意識できることだ。……日記のなかには、今ではとても耐えにくく思われるような状態のなかでさえ、生き、あたりを見まわし、その観察を書き留めたのだ、ということの証拠が見つかる。つまりは、この右の手が当時も今と同じように動いたのだ、ということだ。その今のわれわれはといえば、当時の状態を概観できるという点で、以前よりも賢くなっているが、それだけにいっそう当時のわれわれがまったく無知でいながらもなおかつ、たゆまぬ努力をつづけていた、その大胆不敵さ（die Unerschrockenheit）を称賛し（anerkennen）なければ、ならない。

24 F. Kafka: a. a. O. (14. 8. 13, T315)

——Der Coitus als Bestrafung des Glückes des Beisammenseins. Möglichst asketisch leben, asketischer als ein Junggeselle, das ist die einzige Möglichkeit für mich, die Ehe zu ertragen. Aber sie? (共棲の幸福の懲罰としてのコイトス。出来る限り禁欲的に生きること、独身者よりも禁欲的に、これがぼくにとって結婚を耐える唯だ一つの可能性だ。しかし彼女は?)

25 F. Kafka: a. a. O. (H131)

——近いうちにわたしが死ぬか、あるいはまったくの生活不能者になるようなことがあれば——この可能性は大きい。このところ二晩つづけて、ひどい咯血をしたのだ——、わたしは自分自身をひき裂いてしまったのだ、と言えらるだろう。昔わたしの父は、乱暴だがおよそ中味のないおどかしをして、よくこう言ったものである。「おまえを魚のようにひき裂いてしまうぞ」と——実際は、わたしの体に指一本ふれなかったが——。ところがいまこのおどかしは父とは関係なしに、実現している。この世——Fがその代表者だ——とわたしの自我とが、解決できない抗争をつづけて、わたしの肉体をひき裂いているのだ。(全上註⑬辻理訳)

Falls ich in nächster Zeit sterben oder gänzlich lebensunfähig werden sollte - diese Möglichkeit ist groß, da ich in den letzten zwei Nächten starken Bluthusten hatte - so darf ich sagen, daß ich mich selbst zerrissen habe. Wenn mein Vater früher in wilden, aber leeren Drohungen zu sagen pflegte: Ich zerreiße dich wie einen Fisch - tatsächlich berührte er mich nicht mit einem Finger -, so verwirklicht sich jetzt die Drohung von ihm unabhängig. Die Welt - F. ist ihr Repräsentant - und mein Ich zerreißen in unlösbarem Widerstreit meinen Körper.

■〈日記〉表——執筆順日付（頁番号）

- I. 19. 12. 14 (T 449 f)/26. 12. 14 (T 451)/31. 12. 14 (T 453)/4. 1. 15 (T 454)/6. 1. 15 (T 454)/17. 1. 15 (T 454)/[31. 7. 14 (T 418)]/18. 1. 15 (T 456)/[13. 12. 11 (T 190)]
 II. 15. 2. 14 (T 361 f)/14. 2. 14 (T 360 f)/[3. 5. 13 (T 304)]
 III. 15. 2. 14 (T 361 f)/9. 3. 14 (T 354~369)/25. 9. 17 (T 534)/28. 9. 17 (T 534)

■略語表

T: F. Kafka, Tagebücher 1910~1923, New York/(Frankfurt/M. 1950) (Gesammelte Werke, hg. v. Max Brod)

H: F. Kafka, Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande, a. a. O. 1953

E: F. Kafka, Erzählungen, a. a. O. 1965

■小活字を組んだ〔 〕のなかは、おおよそが本文に応じて紡ぎ出された補足説明、備忘の類である。

■主な参考文献

W. Emrich, Franz Kafka (Athenäum Verl. Frankfurt/M; Bonn, 1965)

Hartmut Binder, Kafka Kommentar (Winklar Verl. München 1975)

Hartmut Binder, »Der Jäger Gracchus« — Zu Kafkas Schaffensweise und poetischer Topographie, Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft 15. Jahrgang 1971 (Alfred Kröner Verl. Stuttgart)

谷口 茂, フランツ・カフカの生涯 (潮出版 1973)

辻 理篇, カフカの世界 (荒地出版 昭和52年)

Gustav Janouch, Franz Kafka und seine Welt (Hans Deutsch Verl. Wien. Stuttgart. Zürich 1965)

J. Born/L. Dietz/M. Pasley/P. Raabe/K. Wagenbach, Kafka-Symposion (Verlag Klaus Wagenbach Berlin 1965)